

わたしはなぜ目をもっているのか

渡部 武

目の不気味さ

子供の頃のにらめっこ。他愛のない遊びだったのか。にらむとなるとただ事ではない。新都福原の平清盛の館にたくさんの髑髏が出現、やがてかたまつて一つの大きな髑髏になって清盛をにらみつけた。さすがは清盛、すぐさまにらみかえしたところ、髑髏は消えたという。目のにらむ威力は人皆知るところ、いざというときに頼りにする。

一つ目小僧とは一体何者なのか。解剖学者養老孟司によれば、人間は第三の目が退化した動物だそう。そういえば三つ目の仏像があり、鬼もいる。両眼でにらまれたって大変なのに、三つ目でにらまれたら、清盛ならいざしらず、私などは気を失ってしまうだろう。目目連というのに至っては、部屋の障子の柵という柵に目が現れて一斉に見つめるらしい。たまったものではない。ところが世には気の強い人がいるものだ。江戸の材木商半沢屋吾助は津軽の空き屋敷で目目連に出会ったが少しも騒がず、その目を一つずつ取っては袋に入れて、江戸に持ち帰って目医者に売り払ったという。その目医者がその目を患者に使ったとすれば、臓器移植の先鞭をつけたのは、わが国だということになるのだが。なに、目は臓器じゃないって。

千里眼などという目の持ち主もあるらしい。現にTVで活躍しているという。古今東西、時間と場所を超えて何でもお見通しとか、これじゃ探偵は失業、歴史家も考古学者も物理学者も化学者もいらなくなってしまう。でもそんな事にはなっていないようだ。探偵は繁盛し、学者の必要はいや増して

いる。ともあれ、人間の目、それよりも目が担う眼差しは不気味である。

こんな経験をしたことはないか。なんとなく人の気配を感じてその方に目を向ける。ぱったり目が合った途端、相手が目を逸す。わたしはなんとなくほっとする。どうしてひとの眼差しを感じたのだろう。相手が目を逸した途端、なぜホットしたのだろう。相手の目のオカルト的超能力がわたしを射たのだろうか。わたしは一度ならずこうした経験をし、これからもするだろう。この経験はわたしだけのものではなさそうだ。ありふれたことらしい。なに、経験したことがないって。それは、あなたが眼差しを向けるに値しないからか、あるいは極めて鈍感だからに違いない。このように日常茶飯事なら、それは超能力、神秘不可思議の霊力をもつ目の仕事ということではないことになる。その証拠に、オカルト流行のお先棒を担ぐＴＶでも取り上げていない。

眼差しを向けられたわたし

サルトルは大いに眼差しにこだわった。フッサールやハイデガーから出発しているだけではなく、ややロンパリのな面貌への彼自身の思い入れもあって、そのこだわりようは大変なものだ。その言うところをわかろうと努力すればするほどに、わからなくなるほどである。それをよいことに、サルトルが憤慨するのも厭わず、勝手に都合よく、利用させてもらうことにする。

眼差しはメデュサ的である。他者の眼差しはわたしを石にする。眼差しを注がれるとわたしのからだは固まってきて、窮屈になる。わたしはこれはおかしいぞ、大変だぞとその眼差しをたどることになり、相手の瞳に出会う。相手の目が離れると石になりかけたわたしは元の自分を取り戻す。こうしたわけではとするとらしい。他人の眼差しで石になるとはどういうことなのだろう。眼差しは当然の事ながら、実にいろいろなさまざまである。きびしい眼差し、冷たい眼差し、刺すような眼差し、射るような眼差し、凍るような眼差し。眼差しは、それぞれに相手が対象化したわたしの姿をわたしに知らせてくれる。あたたかい眼差し、やさしい眼差しとても同様である。あたたかく、やさしく迎えられるべき対象としてある、わたしの姿が立ち現れて来る。眼差しは徹底した主体・主観として他者を

対象化する。眼差しは対象化することで、他者を一個の事実には化してしまふ。これが石に化するということである。この気配を感じたとき、当人が感じるのが、羞恥であり、恐怖であり、あるいは自負である。

唯脳論者養老教授は、このあたりの事情を次のように解説されているように思われる。耳は聴覚・運動の感覚である。目は視覚・停止の感覚である。したがって、耳は時間系において働き、目は空間系において働く。時間において物は流れていくが、空間においては物は静止し固定される。目の視覚は直観的、瞬間的に対象を捉える。一枚の絵が出来上がる。出来上がった絵は永遠である。瞬間が永遠に化する。他者の目・視覚がわたしを対象化したとき、わたしは一枚の絵になってしまう。養老教授の唯脳論では、石に化するのではなくて、一枚の絵になってしまうのである。人が石になれば彫刻と思えばよく、彫刻は絵とともに同じ造形物である。

我田引水のそしりには敢えて目をつぶる。哲学者サルトルと科学者養老教授とは、表現は異なるものの、同じことを考えられていたということは、私にとって大変心強くかつ都合よいことである。

「いらぬっししましよ」

目が、眼差しが、視覚がその向けられた先のものを石に化し、絵にしてしまふとすれば、人間同士にあつてはどういうことになるか。街角で人目を感じ、電車の中で眼差しを感じたら、それを無視することはむずかしい。わたしの意識はその途端に相手に向きを転じ、わたしの眼差しを相手に向けさせないではおかない。そしてその場合、多くは相手が目をそむけることで終わる。

お互いに正面から相対して眼差しを交わし合う場合はどうなるか。わたしと相手は互いに對他存在として眼差しを向ける者であり、かつ眼差しを向けられる者でもある。わたしは相手がわたしを石や絵として支配しようとする、その支配からわたしを解放しようとする。と同時に、相手はわたしの支配から彼自身を解放しようとする。わたしが相手を屈服させ支配しようとする。と同時に、相手はわたしを屈服させ支配しようとする。お互いに相譲らず、負けまいとしてにらみあうことにな

る。ともに對他存在としてのわたしと相手との間の相剋がにらみあいである。そうだ、ここで思いついた。この相剋としてのにらみあいが遊戯となったのが、にらめっこに違いない。羞恥や恐怖を隠す照れ笑い。だから、笑うと負けということなのだ。カントに叱られるが、これは私の独断だ。相手に眼差しを交わし合う相剋は、解放か屈服か、自己確保か自己喪失かをめぐるきびしいものである。このきびしさに耐えて闘い続ける中で、石でない絵でない私が考えられ創られ姿を現してくる。それは自己認識の過程であり、自己実現の歩みでもある。目そして目の担う眼差しは、わたしをしてわたしらしめるものであるらしい。

眼差しによって捉えられた石や絵は一個の情報である。その情報はいまや、さまざまなメディアを経由して伝えられる。わたしたちは、わたしの眼差しよりも、情報化された他者の眼差しに幾重にも取り囲まれている。眼差しはわたしの眼差しではなく、メディアの眼差し、カメラの眼差しである。メディアを介し、カメラなど機械を介した眼差しには、人を屈服させ支配する働きはない。それは相剋とは無縁の眼差しである。だから、たとえばテレビを楽しむ憂さを忘れることができる。たとえ直接眼差しを交わし合うに耐えられないような場面であっても、平然と画面をみつめることができる。その延長上でわれわれは、なんの恐れもなくとも容易に、一億総評論家となることができる。そこには、自己認識と自己実現にかわって自己欺瞞と自己分裂が姿を現す。マスコミの時代、情報化の時代であればこそ、目とその眼差しの人間的意味を問い直してはと思われる。ところが、自分の事は棚に上げて他を顧みるのが世の習い。それに従おう。「達磨さん、達磨さん、にらめっこしましょ」などといった遊ぶ姿はなく、子どもたちはテレビをのぞき、ファミコンのゲームに夢中のようにだ。

(わたなべ たけし・日本思想史)